

令和 6 年 5 月 6 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00098

研究課題名(和文)「真実在説」にもとづくプラトン哲学の再検討

研究課題名(英文) The re-examination of Plato's philosophy on the basis of the theory of real beings

研究代表者

早瀬 篤 (Hayase, Atsushi)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：70826768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主要成果は、プラトン哲学における最重要箇所に含まれる『パイドン』の「形相原因説」に関する箇所(95-107)と『国家』の「三本の指の例」の箇所(522-524)について、従来の「イデア論」を読み込む解釈が深刻な問題を孕むことを示した上で、プラトンはむしろ「善さ」「美しさ」などの可知的対象(=形相)と「善いもの」「美しいもの」などの感覚知覚・信念の対象との対比のなかで自らの形而上学説を提示していることを明らかにしたことである。またこの成果にもとづいて、従来の発展主義解釈に代わる、プラトン哲学の全体像を提示するための準備作業を進めたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

プラトンは「イデア論」を提示した学者として広く知られている。しかしこの「イデア論」はプラトンの著作から取り出されたものではなく、アリストテレスの『形而上学』から取り出されたプラトンの形而上学説の解釈にすぎないことはほとんど知られていない。確かに今もなお多くの学者がイデア論解釈を支持しているのは事実であるが、この解釈には深刻な諸問題が指摘されている。そして私自身はプラトンの形而上学説は「思考の領域」と「感覚知覚の領域」の区分に基礎を置いており、むしろ「真実在説」として理解するほうが適切だと考える。本研究は、プラトン哲学にまつわる誤解を解くことによって一般に波及する学術的意義や社会的意義をもつ。

研究成果の概要(英文)：In this research project, I have mainly dealt with the form hypothesis in Phaedo 95-107 and the example of three-finger in Republic 522-524. Scholars have discussed these passages in connection with the so-called Plato's theory of transcendent Forms, but, as I have shown in this research project, these lines of interpretation involve serious problems. By contrast, I have shown that Plato's main concern is with the distinction between intelligibles, e.g. the forms of goodness or beauty, which may or may not be immanent in things, and perceptibles, e.g. good things or beautiful things. On the basis of this research outcome, I have also done some preliminary work for delineating the general outline of Plato's philosophy as a whole.

研究分野：西洋古代哲学史

キーワード：プラトン 形而上学 イデア論 真実在説

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始したときの背景となっていたのは、世界の古代哲学研究者たちによってプラトン哲学の全体像をどのように捉えるかという問題が近年改めて注目を集めているという事実だった。このような哲学史研究の性格上、この背景は研究開始当初から現在までの4年間という短期間では変化していないと言える。

では、なぜ今になってこのことが改めて問題になっているのだろうか？まず、このことを確認しておきたい。それは一言で言うならば、プラトン哲学の全体像に関して20世紀を通じて学界のコンセンサスとして君臨していた「発展主義解釈」(developmentalism)が、深刻な批判にさらされるようになったからである。発展主義解釈は、19世紀終わり頃に発展した文体統計学的研究を手がかりにして、プラトンが中核的な思想(とくに哲学的方法論と形而上学に関わる思想)を大きく変化させた想定し、その想定のもとでそれぞれの対話篇を読み解いていこうとするものである。しかし1990年代の終わり頃からこの解釈の基本的な想定に関して、Ch. KahnとCh. Roweをはじめとする有力なプラトン研究者がさまざまな問題点を指摘するようになった。現時点では、発展主義解釈にもとづくプラトン哲学の全体像は、昔日の信頼感を完全に喪失している。

しかし発展主義解釈に代わる代替案が支持を集めているわけでもない。Ch. KahnとCh. Roweとは、発展主義解釈を批判するだけでなく、その代替案として「新統一主義解釈」(neo-unitarianism)というものを提案している。この解釈の基本テーゼは、プラトン哲学の中核的な部分はすべての著作を通じて変わっていないというものである。私自身も基本的にはこの「新統一主義解釈」に賛同する。しかし彼らの関心の中心はプラトンの倫理学や政治学にあり、確かに倫理学や政治学に関しては「発展主義解釈」とは異なるプラトンの見解を引き出しているが、20世紀のプラトン学者たちに「発展主義解釈」を普及させる要因となったプラトンの哲学的方法論および形而上学の解釈に関しては、発展主義解釈に問題があることを指摘するに留まっている。

プラトン哲学研究の現状を概観するならば、プラトン哲学の全体像に関しては発展主義解釈をそのまま擁護する学者はほぼいなくなったにも関わらず、それぞれの著作の個別的な議論に関しては相変わらず発展主義解釈の枠組みに囚われて取り組んでいるというような状況にある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、私自身がこの研究をはじめめる前に提案したプラトン形而上学に関する「真実在説解釈」を基礎にして、プラトンの新しい全体像を提示することにあつた。「真実在説解釈」は、発展主義解釈の「イデア論解釈」に代わるものとして提案されており、新統一主義解釈に欠けているプラトンの形而上学説を補完するものとして意図されている。

ここで「イデア論解釈」と「真実在説解釈」の違いについて説明したい。イデア論解釈は、アリストテレスの『形而上学』A巻およびM巻におけるプラトンの哲学の発展を出発点とする。それによると、プラトンはソクラテスの普遍的対象の定義の探究を引き継ぐが、普遍的対象を感覚知覚される世界から離在させてそれをイデアと呼んだという。プラトンの著作に目を移すと、初期に書かれたと思われる著作では哲学的探究の対象となる「形相」(イデア、エイダス)は諸事物に内在すると言われるのに対して、中期に書かれたと思われる著作では「形相」は諸事物に内在することはなくそれ自体で存在すると言われる。そこで、中期著作においてプラトンは、ソクラテス的な諸事物に内在する形相という考えを捨てて、それ自体で存在する超越論的なイデア論を提示したというのが、イデア論解釈である。

しかしプラトンの著作を丁寧に読むならば、イデア論解釈が中期著作に分類する『パイドン』や『国家』においても、重要な箇所では「形相」(イデア、エイダス)は諸事物に内在すると言われることが確認できる。そこで私は、「形相」はもともと諸事物に内在するものも、内在せずにそれ自体で存在するものも含む広い概念であると提案した。またプラトンのポイントは、哲学的探究を行うときに、その最初の段階では「形相」を諸事物に内在するものと見做して探究し、最終的に「形相」をそれ自体で捉えるということにあると提案した。そして「形相」(イデア、エイダス)が諸事物に内在せずにそれ自体で存在するとき、プラトンはそれを「真実在」(ト・オントース・オン)という言葉で呼ぶ。だから、プラトンの形而上学説は「真実在説」と呼ぶべきである、ということになる。

研究当初では、この「真実在説解釈」は大まかな素描が与えられるに留まっていた。そこで、本研究の目的は、「真実在説解釈」を個別の対話篇において再検討し、それを通じて「新統一主義解釈」に欠けていた哲学的方法論と形而上学の側面を補完し、プラトン哲学の全体像を再構築することだった。

3. 研究の方法

本研究は、プラトンの著作のうち、哲学的方法論および形而上学に関連する箇所を、「真実在説解釈」を用いて再解釈していくことによって行われた。

研究を通じて基礎となるのは、哲学的・文献学的な研究方法である。まず、プラトンが紀元前4世紀にギリシア語で書いたものは、その後の長い歴史を通じて書き写されることで伝承されてきたために（現存する最古のものは10世紀の写本であり、それぞれの系統の祖本は50あまり存在する）、複数の読み方が存在する（ただし大部分は明らかな書き間違いである）。そこで、どの読み方が正しいのかを慎重に吟味する必要がある。また哲学的テキストを分析する手法として、それぞれの議論の命題間の論理的関係を整理して、議論の妥当性を考察する必要がある。さらに、とくにプラトン哲学に関しては膨大な二次文献が存在しているために、学者たちの議論を慎重にかつ批判的に考察することが必要になる。

この研究方法を用いながら、(1)「知識獲得までの哲学探究の全行程」を描写する『パイドン』や『国家』などにおける形而上学的議論に取り組んだ後に、(2)『ソピステス』と『ポリティコス（政治家）』における「総合と分割の方法」に取り組むというのが、研究開始当初の方法だった。

しかし研究途中で、他の研究者と情報交換をするなかで、研究開始時点の私は簡単に片付けられると考えていた対話篇『クラテュロス』における哲学的方法論の議論が、(1)と(2)の両方に関わり、本研究の目的にとって予想していたよりも重要であることに気づいた。しかも、本研究に直接関連するのはこの対話篇のなかでも「名前制定の技術」が説明される424a7-425b5のごく短い部分に限られているにもかかわらず、その箇所の従来の解釈は、対話篇全体をどう理解するかに応じて、大きく変わってくるという状況にあることが判明した。そこで、当初の予定を変更して、(2)の「総合と分割の方法」を研究すると同時並行的に、この対話篇にしっかりと取り組む必要が生じた。

4. 研究成果

本研究の主要な成果は、二つに分けられる。ひとつ目は、プラトン哲学の全体像との関連から、イデア論解釈から距離をとりつつ、『国家』および『パイドン』の中核的な形而上学議論を再考察したことである。二つ目は、「総合と分割の方法」を研究するに当たって、従来ほとんど議論されてこなかった『クラテュロス』の関連箇所を同じくイデア論解釈に訴えることなく解明したことである。ただし、二つ目の成果は現状では草稿段階に留まっており、論文の出版には至っていない。そこで、ここでは『国家』および『パイドン』に関する成果を説明したい。

まず、『国家』に関しては、522e5-524d5における「三本の指の例」の議論に関して、従来の解釈の問題点を明らかにするとともに、新しい解釈を提示した。この箇所はプラトンの形而上学説の基本構造を理解するためにきわめて重要な部分であるにもかかわらず、これまで誰も丁寧に分析してこなかった。とりわけ問題となるのは、多くの学者はこの議論を「初期著作におけるソクラテスの定義探究」と重ね合わせて理解してきたが、そのような理解は明らかにテキストの記述と不整合なことである。そこで私は、この議論のポイントが、形容詞で表現される「大きい」「小さい」などの事物の性状（これらは感覚知覚によって捉えられる）と抽象名詞で指示される「大きさ」「小ささ」（これらは思考によって捉えられる）とを区別することにあると論証した。

はプラトンの表現を使うならば「指と結合する大きさと小ささの可知的形相」と言い換えられる。またこのように理解することで、前後の文脈も適切に理解できることを明らかにした。つまり、この議論は、生成から実在へと魂を向け換える教育に数学的諸科目がふさわしいことを明らかにするために提示されたものだが、数学的諸科目もまた「相互に結合する数や形などの可知的形相」を対象にするのである。

次に、『パイドン』に関しては、『パイドン』95a4-107b10において、登場人物のソクラテスが対話相手のケベスの反論に回答するなかで提示される「形相原因説」を詳しく検討した。この箇所はプラトンの形而上学説を理解するための最重要箇所のひとつである。これまで学者たちは、アリストテレスの報告にもとづいて、ソクラテスはこの箇所で超越的イデアを原因として提示していると思われてきた。そしてこの説は「イデア原因論」（英語では、大文字ではじまるFormsを使ってthe theory of Forms as causes）と呼ばれてきたのである。しかし超越的イデアを原因と見做す解釈は、肝心のプラトンのテキストと整合的でないことが指摘されている。学者たちは離在解釈と内在解釈という二つの異なる立場に分かれるが、どちらの解釈にも深刻な諸問題が指摘されており、実質的に行き詰まりの状態にある。このような研究状況を背景として、私はイデア解釈の諸前提を廃棄して、真実在説解釈の立場（プラトン自身のテキストに立ち返り、形相はそれ自体で存在するだけでなく、諸事物のうちにも存在するのであり、またそれ自体で存在する形相が「真実在」と呼ばれると見做す立場）からこの説を解釈することで、この説の意味と役割とを整合的に理解できることを論証した。イデア解釈では整合的に説明できないので、この説は「イデア原因論」ではなく、「形相原因説」と呼ばれるのが相応しいと考える。

一見すると、これらの研究成果は個別的な箇所の解釈に関わるものにすぎない。しかし「新統

「主義解釈」と「真実在説解釈」の立場からプラトン哲学の全体像を描写するとき問題となるのはこのような個別的な箇所であるので、すでに同意が成立しているプラトン哲学の全体像の残りの部分を埋めていくことは、難しいことではないのである。

最後に、社会状況との関連で研究の遂行が上手く進まなかったことを記しておきたい。本研究の開始時期は運悪く新型コロナウイルスの流行と重なってしまい、そのために予期しなかった雑務が発生して研究の時間を十分に確保できなかったほか、当初予定していた海外渡航をすべてキャンセルせざるをえず、また国内学会の一部も中止になった。本研究では、この他に『クラテュロス』の研究や「総合と分割の方法」の研究を行ったが、暫定的な研究成果について議論する機会がなかったために、いずれも草稿の段階に留めざるをえないものが複数存在している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 早瀬篤	4. 巻 608
2. 論文標題 プラトン『パイドン』における形相原因説	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 哲学研究	6. 最初と最後の頁 43-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早瀬 篤	4. 巻 53
2. 論文標題 三本の指の例が示すこと（『国家』522e5-524d5）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古代哲学研究METHODOS	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 早瀬篤
2. 発表標題 プラトン『パイドン』における形相原因説
3. 学会等名 京都哲学学会講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 早瀬篤
2. 発表標題 三本の指の例が示すこと（『国家』522e5-524d5）
3. 学会等名 古代哲学学会談話会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------